

タブレットを用いた「体づくり運動」の授業実践報告

愛知県立一宮高等学校 定時制課程
教諭 後藤 晃伸

1 学校の概要及び実態

本校は昭和 23 年に愛知県立一宮高等学校に夜間定時制課程として併設されました。その後、愛知県立一宮東高等学校として独立をしましたが、一宮高校に再度併置されました。

現在は 1 年生 80 名、2 年生 56 名、3 年生 31 名、4 年生 22 名の合計 189 名が在籍しており、一昨年より 1 学級定員数が増えています。15 歳から 40 歳代までの生徒が在籍し、何らかの理由で高校を中退したり入学できなかつたりした人、特別に支援を要する生徒、外国籍や不登校の経験などで、一般的な学力が備わりきっていない生徒などで構成されています。

授業時間帯は 17:20 から 21:00 までで、部活動に所属している生徒はその後も学校に残って活動し、22:00 までには帰宅をしています。また、ほとんどの生徒は、午前中からアルバイト等の仕事をしながら勉学に励んでいます。

2 主題設定の理由

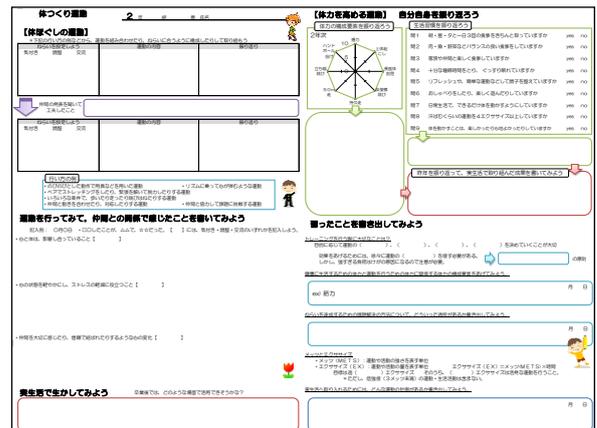
体づくり運動を実施することになって 10 年以上が経過していますが、未だに授業作りに関して困惑しているのが現状だと思います。その理由として、学習指導要領を理解し切れていない状況や学習指導要領を理解していたとしてもゴールが見えづらく単元計画を立てにくい状況があるように思われます。そこで、今まで工夫してきた体づくり運動の授業実践を報告するとともに、現在開発中である体づくり運動アプリを活用しながら、その様子を報

告することにしました。

(参照 ; <http://karadatsukuri.jp>)

3 考察及び指導の改善

今までの体づくり運動の授業では、パワーポイントを用いたり、学習カードを活用したりして授業を進めてきました。知識を習得する際にパワーポイントを用いることは効果的で、運動例を目視できることは非常に有効だと感じています。また、運動計画を立てる際には学習カードを効果的に活用し、個々の運動計画に対応できるカード作成に工夫を重ねました。20 ページ以上にわたる学習ノートに A3 裏表 1 枚にまとめるなどして簡素化し、使いやすくなるように工夫しました。こうして積み重ねた資料は、現在でも十分に活用できる資料ではありますが、本校定時制においてはさらなる工夫が必要だと感じています。

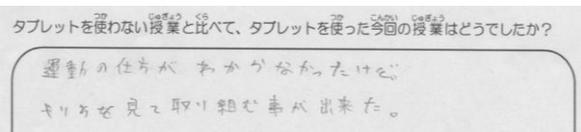


まず、用語をさらにわかりやすい表現に変える必要があること。もうひとつは、個々に対しての動機付けを手厚く設定することなどが挙げられます。前者は、外国籍の生徒を対象に、シンプルで的確な

表現に改めることやルビをふるなどして漢字のサポートすること。極力文字数を少なくし挿絵を用いるなどして教材に取り組みやすい工夫をすることなどが必要だと考えました。後者では、運動に対して消極的な生徒も少なくなく、生徒一人一人に対してどうアプローチしていくかが課題です。学習カードを通じて意思疎通を図るのも一つの手段ですが、現場で声をかけて課題を解決していくのが理想です。ただ、それぞれの運動計画や興味の方向性に対して手厚くサポートしていくことは物理的に難しいのが現状です。

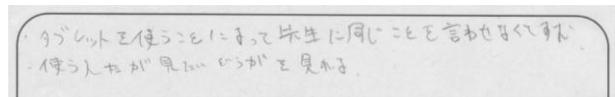


次に、体づくり運動アプリを活用した授業実践報告です。アプリを活用した最大の特徴は、いくつかの運動例を動画で確認することができ、自分のタイミングで静止や再生ができることです。また、言葉では表現しづらい運動例もわかりやすく伝えることができ、個々に応じて選択できることも大きな利点です。

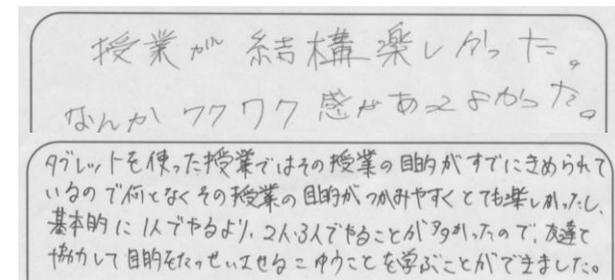


生徒一人一人へのアプローチといった面に関しても、アプリ内で運動計画を見直していけるので、個々への声かけや質問にも十分対応することができ、余裕をもって指導することができました。ただ、タブレットに関しての未熟さからバグの対処に追われてしまったり、写真などの

他のアプリで遊んでしまう生徒への対応に追われたりと違った側面で余裕がなくなってしまう時間もありました。



また、教材が目新しいこともあって、動機付けに関してもかなりの効果がありました。授業の方法としても、個人だけの活動にならないようにグループで活動させるようにし、お互いに協力できるように授業展開を心がけました。



指導に際しても、アプリに設定してある単元計画に従って授業を進めることで、体づくり運動の全体像や校種間の連携を把握することができると感じました。また、個々のタブレットで行った授業内容が教員用のパソコンで一括管理でき、評価したコメントが次の授業時に反映されることも生徒への動機付けにつながったと感じています。ただ、教員自身がアプリに頼り切ってしまう、アナウンスのような形で授業が進められてしまうことは本末転倒ですので、十分に単元の目標を理解した上でアプリを活用することが求められると思います。

4 まとめ

教材の開発には作成者の意図が大きく反映されます。その意図を理解し自分自身で教材を改善していかないと十分な効果が得られないような気がします。今後もよりよい指導を目指し工夫をしていきたいと考えています。